小児慢性疾患(臓器系)に関する研究

評価委員　兵庫医科大学小児科　蒲　生　逸　夫

各班の研究は，基礎的というよりも，むしろ臨床上の対策の早期確立をせまられている諸問題を選んで追究しているといえよう。

その成果は見るべきものがあって，直ちに対策の指針に用い得るものが多い。またなかには，それを基礎にさらに新たな問題のくわしい追究の必要性を明らかにしたものも含まれている。

小児慢性疾患の実態調査

特定疾患医療費支給者台帳を資料として小児慢性疾患の分布状況を明らかにすることは，その対策の一層の前進に役立つものと言えよう。その成績によると，第1位の慢性腎疾患が約1/3の多数を占めており，その予防あるいは生活管理や医療指導に，一層努力すべきことを示している。

第2位の慢性心疾患では，先天性心奇形の外科的治療とともにやはり術後の生活管理と医療指導が重要であろう。

第3位は悪性新生物であるが，第5位の白血病を含めて，進歩した治療法の効果をあげるためには，早期診断への努力が望まれる。

第4位は喘息であるが，これに洩れている大気汚染公害地域の分を合わせると，その実数は驚くべく多いわけで，アレルギー学方面からの追究や生活管理を中心とする対応が対策の重点となろう。

尿路感染症に関する研究

尿路感染症の治療基準の設定は，本疾患が再発，慢性化の傾向を有することからも，極めて有意義である。その検討に当って，使用薬剤など治療の実態調査を基礎としていることは，適正な方法と言えよう。今後さらに，この基準による治療成績に基づいて，治療完了又は治癒基準などの設定を行うことを期待する。

小児の尿路奇形に関する研究

尿道下裂発生と性ホルモン使用との関係については重大な問題であるだけになお一層の検討を期待したい。

小児心筋炎に関する臨床的研究

小児心筋炎はその数は多くないが，突然死をきたすおそれがあるので，軽視できない。

その研究はなお，初期の段階にあると言えようが，それだけに診断基準及び手びきを提案したことは有意義である。これによって，一方では本疾患に対する医家の関心を高めるとともに，集まった症例の検討によって一層有用な診断基準の検討へ進むことなどを期待する。

先天性心疾患手術後の長期予後調査と管理基準に関する研究

先天性心疾患児治療の進歩に伴って，その手術後管理がますます重要となってきた。ことに学校保健の上からは，不慮の事故発生に対する責任追及などとも絡んで，具体的な生活管理方針が要請されているが，さらに家庭での生活管理についても同様である提示された長期管理基準案は，これらに応えるものであり，極めて有意義である。次の段階として，これに基づく実施成果について学校保健関係者の意見を求めるなどのことも行って，基準決定にまで進めるべきであろう。

川崎病の突然死予防に関する研究

川崎病はその多発とともに研究も大いに進展し，乳幼児に好発する系統的血管炎を主体とする急性炎症性疾患と解せられ，冠状動脈後遺症による突然死予防こそ治療の最重点であることが明らかとなった。しかし，その原因や発病秩序はなお不明である。

この現状において，本病治療の経験豊富な班員の討議成果による治療及び管理に関する提案は，具体的に示されており，極めて有意義である。

今後さらに本案による経験例が集積されて，必要あれば改変を加え，治療指針として広く用いられることを期待する。

日本人小児の高脂血症に関する疫学的，並びに臨床的研究

小児の高脂血症の研究は動脈硬化症の予防の関係から，ますます重要な問題となってきている。

定量方法の基準化とともに，疫学的研究ではその原因追究及び予防の見地からも一層の発展が望まれる。

小児気管支喘息の臨床的研究

喘息はその症状程度に大差があり，しかもそれによって治療法や予後が左右される。それ故に，点数評価による重症度の判定方法を設定したことは，臨床的に極めて有用である。今後さらにこの判定方法による重症度と経過予後や治療法の差異の検討を期待したい。

喘息の非発作時における訓練運動などの生活管理の指針を定めたことも有用である。この際，禁止事項よりもむしろ許可奨励事項の具体的提示の方向を期待したい。

乳児閉塞性黄疸の早期診断法の開発と管理基準の設定に関する研究

１か月検診で黄疸ある場合を鑑別の対象とする詳細な鑑別手順表が提示されたが，実用には少し繁雑にみえる。例えば，第１段階で，問診，診察所見及び一般的臨床検査という診断段階に従って，閉塞性黄疸か否かに分け，第２段階でさらに血清ビリルビン分画，Hbs Ag，肝生検など所要の特殊検査を加えて閉塞性黄疸を鑑別するような表示を試みることも有用ではなかろうか。また，閉塞性黄疸の大多数を占める乳児肝炎と先天性胆道閉鎖症の両疾患は，治療が遅れるほど予後が悪いが，その治療法が全く異るので，早期診断が切望されている。

この鑑別に役立つ基準表の設定なども望みたい。

胆道閉鎖症児の管理基準を設定したことは，小児科医と外科医の本患児に対する治療方針の一貫性のためにも極めて有用であろう。

若年性関節リウマチに関する研究

全国実態調査結果は最近の本疾患の増加を明示している。しかし報告者も認めるように，なお洩れているおそれが少なくない。それを補うためには，一部特定地域の一層精密な調査なども役立つと思われる。

診断基準の検討は，診断困難な本疾患の追究には極めて緊要である。作成された診断の手引きによる診断当否の実績追究が望まれる。

治療の原則検討も緊要なことで，これによる治療成績の検討を望みたい。

なお後遺症を避けるための適度の運動とは，具体的にどのようにすべきかを示してほしい。

鎖肛術後排便障害に関する研究

鎖肛手術は消化管末端の閉塞を除くだけが目的とすれば，小児科医からみて，比較的容易と思われる。しかし，もちろん術後の排便障害を残さないことが望まれるから，それだけに手技は複雑となり，新生児であるだけに，非常な困難を伴う場合が少なくなかろう。術後の排便障害の実態調査を手掛りに，その防止への研究進展を期待する。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

各班の研究は,基礎的というよりも,むしろ臨床上の対策の早期確立をせまられている諸問題を選んで追究しているといえよう。
その成果は見るべきものがあって,直ちに対策の指針に用い得るものが多い。またなかには,それを基礎にさらに新たな問題のくわしい追究の必要性を明らかにしたものも含まれている。